当世噺家気質　その２２６

柳家小満んと「大仏餅」

多少なりとも落語というものに興味があるなら、柳家小満んの最初の師匠、八代目桂文楽の最後の高座が「大仏餅」であることを知らないわけがない。

1971 年 8 月 31 日の第 42 回落語研究会（つまり、当会だ)。文楽は二番手で「大仏餅」を演じたが、噺の途中、登場人物の一人、「神谷幸右衛門」の名が出ずに絶句。「誠に申し訳ありません。勉強し直してまいります」と深々と頭を下げて高座を去った。その後、二度と高座に姿を表さず、同年 12 月 12 日に 79 歳で亡くなっている。

文楽の絶句から 10 年たった 1981 年の当会で、小満んは「大仏餅」を演じた。もともと林家彦六が演じるはずだったが、会の直前に彦六が入院してしまい、“直系”の小満んにお鉢が回ってきたのだ。

本番では、舞台袖にいた前座（若き日の古今亭右朝だったらしい）がサゲの間際にヨスケ（鉦）を落として大きな音を出すハプニングもあったが、小満ん

は何とか乗り切った。

文楽の最後の弟子であり、文楽ネタの優れた継承者として評価の高い小満んは、その後もしばしば「大仏餅」の注文を受けた。だが、いろいろ思いの詰まったネタなので、「そうですか」と気軽に引き受ける気にはならないのだという。

だが、今回は、小満んのほうから「それじゃ、『大仏餅』で」と申し出た。

「師匠文楽があの年の12月に亡くなってから今年で丸５０年。まさにその時、12月の研究会にお呼びがかかったんだもの。あのネタしかないなって思うでしょ」

あの日の研究会のことを、小満んにもう一度思い出してもらおう。

「あの頃、師匠は肝硬変が悪化して、高座に上がれる状態じゃないかったね。寄席も休んでいた。東横落語会と落語研究会がどうしてもというので、浅い出番で負担の少ない『大仏餅』ならという条件で引き受けたんだよ。師匠は本番前にいつも自宅でその日のネタをさらうんだけど、前日の東横がうまくいったので、研究会の当日はさらわなかった・・・」

文楽も「その時」を覚悟していたのだろう。絶句の後も、普段と様子は変わらず、楽屋で自分の前に上がった小満んの「宮戸川」を「いずれよくなります

よ」と褒めていた。

「実はね、東横の日に、もし高座でしくじったら何と言おうかと師匠が考えていたんですよ。『勉強し直してまいります、というのはどうかね？』とあたしに聞くから、『師匠、それはハマりますよ！』と答えたら、『そうかい』と笑ってた」

文楽十八番のすべてを演じる小満んだが、さすがに「大仏餅」の口演回数は多くない。

「でも大丈夫だよ。高座には掛けなくても、『大仏餅』の依頼があるたびに、どうやろうかとあれこれ考えていたんだもの。もちろん師匠には及ばないけどね」（長井好弘）

☆ 長 井　好 弘（演芸評論家）
1955 年 8 月 10 日、東京・江東区深川新大橋生まれ
元読売新聞編集委員。都民寄席実行委員長。
浅草芸能大賞専門審査員。
『僕らは寄席で「お言葉」を見つけた』
『新宿末広亭のネタ帳』
『寄席おもしろ帖』
ほか著書・編書多数。
TBSテレビ主催　第五次「落語研究会」プログラムに
2003 年 3 月から「当世噺家気質」を執筆中